

---

# ベンチとコーヒー

滾

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ベンチとコーヒー

### 【Nコード】

N0980B

### 【作者名】

滾

### 【あらすじ】

男は最愛の女性に真実を告げられず、一人公園で何かを思う。ちなみにこれはBumpofchickenの「ベンチとコーヒー」をベースに書いています。

## 一杯目 下手な嘘

朝早く、俺は起きた。

ああ、違う。嘘だ。

眠れなかったんだ。

夜からずっと横になっていた。横になって、ごろごろごろ。それでも、一睡もすることが出来なかった。

半身を起して、カーテンの隙間から僅かに差し込む陽を見る。いつも会社へ向かう時間だ。

「んん・・・？起きたの・・・？」

僕の隣で、彼女が体を起した。

むにやむにや、と目を擦って笑顔を作る。

「えへへ・・・、オハヨ」

屈託の無い笑顔。

その笑顔に、心が痛む。

「ああ、おはよう」

僕も笑った。

つもりだった。

でも、

「・・・？どうしたの・・・？」

彼女は言って、怪訝そうな顔をした。

笑えてなかったのだろうか。

僕は焦って答えた。

「なんでもないよ」と。

「大丈夫」と。

僕はまた嘘を言った。

何でも無くなかった。

大丈夫じゃ、無かった。

朝早い朝ごはんを食べて、スーツに着替えて、僕は玄関に立っていた。

「行つてらっしゃい。頑張つてね」

彼女は小さく手を振って、笑った。綺麗に笑った。

「行つてくるよ」

僕は、笑えているだろうか？

彼女がまた怪訝そうな顔をした。

上手く笑えていなかったらしい。

彼女が何かを言おうと口を開きかけた。

僕は何かを言われる前に、早々に家を出た。逃げるように。

向かう場所なんて、無いけど。

## 一杯目 下手な嘘（後書き）

B U M P O F C H I C K E N の「ベンチとコーヒー」を僕なりの解釈で小説にしました。B U M P の小説はこれで二つ目です。十話にも満たない数で終わると思うので、楽しんで頂ければ幸いです。

## 二杯目 襟の如何ともどかしさ

僕は駅前の公園のベンチに座っていた。さっき自販機で買った暖かいコーヒーを飲みながら。

もうすぐ、東の空から朝日が高く上ろうとしている。徐々に、人の通りも多くなっていく。

僕の前を横切る人達。その数が多くなっていく。

だけど僕は、ベンチの上から動くことが出来なかった。

いや、動くことはできるさ。ただ、行く場所が無かった。

簡単な事だ。

君はクビだ

たったの一言が、人の人生を奈落の底へ突き落とす。

本当に簡単な事だ。

たったの一年ちよつと働いて、新しい出来る社員が入ってきたらクビ。

別に何かミスをしたわけじゃなかった。

それでも、僕はごみのように捨てられた。

彼女には、まだ言っていない。

言える訳がない。

僕の事を信じてくれている彼女に、どうして本当の事が言える？

リストラしたんだ

言える訳がない……。

「はあ……」

僕はため息をつく。つきたくなるさ。ため息の一つや二つ。

昇る朝日が、僕を明るく照らす。

気が滅入るくらい、綺麗な朝日だった。

お願いだから、僕を照らさないでくれよ……。

怒りとか、悲しみとか、不安とか。そんな感情がごっちゃになって、更に太陽の光も相まって、僕に襲い掛かる。

……太陽の陽をこんなに眩しいと感じたのは初めてだ。

そんな事を考えながら、僕は顔を上げた。

上げて、周りに視線をやる。

僕がここにのんびりと座っている事が、段々不思議に思われる時間帯になっていた。

僕の前を通り過ぎる人達は、一様に僕に視線を向ける。

「何をしてるんだろう？」と言う視線は勿論、「ああ、アイツ……

」と、解ったような顔で通り過ぎていく人も居た。

僕は全てを悟られないように、隠れるように身を縮めて顔を伏せた。しかしそうすると、手に持ったコーヒークップを見つめることになる。コーヒークップに反射した僕の顔はとても情けない顔をしていて、僕はコーヒークップを振ってそれを見ないようにした。

ああ、と、呟く。

僕は、本当に情けない。

ふと、コーヒーから目を背けて駅の方を見る。

すると、スーツを着た一人の男性が目に入った。何故か、と言えば、彼のシャツのエリが立っていたからだ。

しばらく目で追っていると、男性は、はたと立ち止まって襟を直し始めた。気付いたようだ。

ソレを見て、何故だろう、ズキン、と胸が痛んだ。

思わず、目を背ける。

背けて、「何でだ？」と呟いた。

何で目を背けた？と。

いや、答えは解っていた。

背けた理由。

自分を見ているように思えたからだ。

周りを窺って、隠れるように襟を正す。  
あの姿が、今の僕にそっくりだった。  
本当に、もどかしくてまいるな・・・。

いつもの僕はとうだ？

彼女の前では何時も格好つけて、強がって、子供みtainな屁理屈を  
ツラツラ並べて粹がってる。

それでも、いつも焦って、それを取り繕うために必死になって、そ  
れでも、それを認めることはしない。

本当に、幼稚なんだ、僕は・・・。

何故だか、こんな時なのに、いつもの自分が冷静に判断できて恥ず  
かしい。いや、こんな時“だから”、か。

だけど、と思う。

ああ、だけど。

あの人が、

さっきのあの人が、どうか、会社に間に合いますように・・・と。  
僕に分まで、何て、言わないけども。



## 二杯目 襟の如何ともどかしさ（後書き）

二話目です。何か主人公が情けない感じになりましたが、気にしません。

ともあれ、楽しんで頂ければ幸いです。

### 三杯目 ボクサーと僕

さて、どれくらいの時間が経つたろうか？

本当に時間が経つのも忘れて、僕はだたベンチにコーヒを抱えて座っていた。

本当に、それだけ。

携帯電話をいじるでもなし、どこかを見ているわけでもない。本当に何もしていなかった。

半分眠っていた、と言っても別に差し支えはないだろう。

ああ、いつもなら、今頃営業に回っている時間だな……。と、歩いているサラリーマンを見て思う。

いや、本当なら、もっと別の

と、そこまで考えて、僕は頭を振った。

いや、全て終わった事だ。

仕事とか、そんな事以前の、まだ夢を持てていて、それが当たり前だった頃の事。そんな事は今更思い出したところでどうなるものでもなかった。

僕は更に暗くなってしまった思考を払おうと、ふと、重い頭を上げた。

そして目に映った先。

昔、よく彼女と歩いた道が見える。

今の彼女の前の彼女とよく歩いた道。

その道を、一人の男性が走っていた。

並木道をジグザグに走り、何度も往復を重ねている。

シャドーボクシングをしながら、走る。走る。

ひたすら走って、流れるあせも、そして自分を見ている僕にも気付くことは無い。

恥ずかしくないのだろうか？と、ふと思う。

僕は勿論の事、周りにも彼を目で追う人が多く居る。

その中で、必死になってシャドーボクシング。

恥ずかしくないのだろうか・・・。

もう一度考えて、

いや、と首を振る。

気にしないのだろう。と。

人に見られようが、どう思われようが、気にしないのだ。

何故だろう？

何で、あんなに自信が出てくるのだろうか？

今は昼頃。決して人通りは少ない。

そんな中を、何であんなに自信を持って走れる？

あんな映画に出てくるような格好をして、手にテーピングをして、シャドーボクシング。

恥ずかしいとか、本当に思わないのだろうか？

もう一回考えたが、

やはり僕は頭を振った。

いや、と。

自問自答に区切りをつける。

信じているんだ。

僕は思った。

そうだ。信じている。

自分を。

自分が選んだ道を。

ボクサーになろう、と思っているのかは分からない。まあ、こんな時間帯にあんなことをやっているのだから、間違いは無いだろう。ボクサーになる。もしくはチャンピオンになる、という夢のための努力。

自分が選んだ夢への努力。

そのどこに、何を疑う事がある？

恥じる事がある？

彼はそう思っているのだろう。

だから誰に見られようが、何と言われようが関係ない。

何故なら、それが自分の選んだ道だから。

僕は思わず顔を伏せた。

・・・彼に対して、僕はどうだろう？

そんな事を考える。

目指した夢を諦めて、仕方なく選んだ進路先の会社に入社して、今、どうしている？

結果、どうなった？

この様<sup>さま</sup>だ。

本当に情けないんだ。

情けなくて、まいつてくる。

いつも格好つけて、強がって、言い訳臭く生きている。

無駄に悟った降りをして見せて、それ以上を知らうとしない。努力もしい。

彼はきつと凄いのだろう。

僕には無いものを持っている。

この先有名にならずとも、自分の子供に自分の過去を胸を張って話せるのだろう。

ならば、

と、僕は顔を上げた。

未だ走りシャドーボクシングをする彼を見、思う。  
ならば、どうか。

どうか、彼が試合に負けませんように、と。

僕はコーヒーに視線を戻して、心の中で祈った。

僕の分まで、とは、言わないけれど。

### 三杯目 ボクサーと僕（後書き）

ジャンルを“恋愛”に変えたんですけど、大丈夫でしょうか。駄目なようなら又戻します。

ころころ変わって申し訳ありません。

ともあれ、楽しんでいただければ幸いです。

## 四杯目 黒と赤と僕と昔

僕は、アレだ。

本当はミュージシャンになりたかったんだ。

高校の時はバンドもやってて、結構人気もあったりした。

唄った。

色々、色んな事を唄に乘せて歌いまくった。

けど、今、僕はこの様だ。

じゃあ、何を唄っていたんだろう？

結局、一体誰に唄っていたのだろう？

それを僕は、ちゃんと解っているんだろうか？  
解っていたんだろうか？

いや、

そもそも何を理解<sup>わか</sup>っているんだろう？

本当に疲れてきた。

ただ座っているだけでも、疲れることは疲れるらしい。

あれから少し減ったコーヒーを持って、僕はまだ座ったままだった。  
もう、陽は傾きつつある。

本当に長い間ベンチにただ座っていた。

本当に、疲れてきた

さつきからずっと、嫌な考えばかりが浮かんでいた。  
何か、

何だ・・・。

解らないけど、苦しかった。  
何か、諦めた何かが・・・。

「あはははは」

「あはははは」

不意に、笑い声がした。

小さな、男の子と女の子の声だ。

自分が笑われたのかと思って、僕は勢いよく頭を上げた。  
見えたのは、

二つのランドセル。

赤と青の、二つのランドセル。

小学生だ。どうやら、僕を笑ったわけではなさそうだ。  
楽しそうに、向き合いながら笑顔で家路を辿っている。

仲の良い、二人なのだろう。

ああ、きつとそう。

不意に、黒が言った。

「きみがスキだよ」と。

本当にすんなりと、容易く言っただけだ。  
ポカーン、と、なる僕。

呆然と、彼等が歩いていくのを見守った。

簡単に言うもんだ・・・。

と、心から思う。

僕はどれだけ気合を入れて、死にそうなくらい鼓動を刻む心臓を抑えて、彼女に告白したと思ってるんだ？

それを、簡単に言っただけだ。ガキが。ただの小学生だ。  
一年生くらいだろうか。



全てをまだ見切れていない、そんな年の頃。

なあ、少年。

心の中で、あの子に話しかける。

人生そんなに簡単じゃないんだ。と。

遠ざかる二人を見ながら、皮肉を浮かべた表情になる。

僕にも、そうさ。小さな頃に好きな子が居たんだ。

仲が良かった。

一緒に帰りもした。

周りからも、“そういう二人”として見られてた。

だから、僕は言った。

「スキだよ」と。

彼女も笑って、

「わたしもスキだよ」と言った。

小学一年生の時だ。

本当に、嬉しかった。

本当に、幼心ながらに嬉しかった。

だけど、どうだ？

今彼女はどこに居る？

知らない。

どこか遠くなのか、結構近所なのか。さあ、どこで暮らしているの  
だろう。

幸せにしているのか、それともそうでもないのか。

解らない。知らない。知ろうとも思わない。

なあ、少年よ。

これから色々な事があるんだぜ？

心から、黒い思念だけが浮かび上がって、心の中で少年を追いかける。

これからもずっと、その子と一緒に居られると思ってるだろう？  
けどな、そんなに簡単じゃないんだ。

これから、いろんな男が彼女の前に立ちはだかるんだ。  
それを、そいつ等全員を避けて、立って、彼女を守るか？  
無理だね。

心の中で、そう言い切る。黒い、暗い感情が心の中で言葉を吐き続ける。もう、二人の姿は見えなくなっていた。

絶対に無理なんだよ。そんな事。

彼女だって、心変わりもするだろう。

気付いたら、隣に居なくなっているんだ。

そうしたら、あとは泥沼だ。

顔を合わせるだけで、気まづくなって、顔を背けてしまう。

それは自分だけで、相手はなんとも思ってたなかったと気付いて、尚傷つくんだ。

なあ、少年よ。

僕は心の中であの子に話しかける。

それでもお前は、彼女を好きだと言えるかい？と。

僕は心の中で、少年に聞いた。

本当に、自分でも冷たい声だと思った。

それでも、心の中の少年は、笑顔のままで胸を張って言うんだ。

「ぼくは、きみがスキだよ」と。

僕を通して、彼女に向かって言うんだ。

屈託のない笑顔で、何も恐れることなく。

ああ、そうさ。

そうさ。そうなんだ。

僕は目頭を押さえた。

一途なんだ。

本当に、呆れる程。

泣きたくなる程一途で、彼女を思って、夢追いかけて……。

「すう……」

何かが溢れそうになって、僕は息を吸った。

あんな気持ち、どこにやったっけ？

どこに、隠しちまった？

格好つけて、強がった。

アイツなんて、もう何でもないよ。と。

何だ？

大人気取りか？

素直な気持ちも言えないままで、ヘラヘラ笑いやがって。

ああ……。と、僕は顔を上げる。

あの子が歩いていった方を見て、

なあ。と、笑う。

なあ、少年よ。

頑張れよ。

彼女を一途に思ってやれよ。

頑張れよ。

彼女が好きなんだろう？

くじけないでさ、胸張って彼女が好きだって、伝え続けるよ。

彼女が嫌になるまで、伝えて伝えて、馬鹿らしくなるまで言うてやれよ。  
なに。

別に僕の方まで、とは、言わないけどさ

#### 四杯目 黒と赤と僕と昔（後書き）

長くなりました。

主人公がものすごく浸ってます。

ただの妄想してる危ない人にさえ見えます。

昔の彼女とのやり取りが妙にリアルなのは気にしてはいけません。  
ともあれ、楽しんで頂ければ幸いです。

## 五杯目 謝罪

暗くなるうとしている。

何とか、夕暮れがそれを引き止めている感じだった。

まだ、陽は落ちない。

何故だろう。

日が落ちるのが、少々悲しかった。

朝、あんなに億劫だった太陽の陽が、今では別れが惜しい。  
まあ、明日になれば、又日は昇るのだろうか。

僕は、どこで迷っているのだろうか？

何を、今まで恐れていたんだろう？

誰に唄えばいいのか？

本当に簡単な事だった。

自分自身に歌ってやれば良かったんだ。

本当に、簡単な事だった。

ふと気付くと、ベンチの周りにハトが集まっていた。

ずっとここに座っていた僕に、警戒心を解いたのだろうか。  
だけど、

「ゴメンな・・・」

僕は謝った。

ハトに向かって。

馬鹿みたいだ。

「餌、持ってないんだ・・・」

ハトに向かつて呟きながら、僕は何か胸の奥からこみ上げてくるのを感じた。

ああ・・・、多分、これ以上喋ったら泣く。そう思った。

なのに、

「ゴメン・・・」

僕は謝った。

「お前等の役には、立たないんだ・・・。ゴメンな・・・」  
謝った。

ハトに向かつて。

いや、多分、ハトに謝ってるわけじゃなかった。きつと。

違う。

何か、今まで気付いてやれなかった何かに、  
気付いていても、見てみぬ振りをしていた自分の何かに、

きつと、今までの僕に、  
今までの自分自身に、

ずっと、謝りたかったんだ・・・。多分・・・。  
きつと・・・。

俯いた顔の下には、幾つかの染みが出来ていた。  
ポツポツ、ポツポツ、と。

## 五杯目 謝罪（後書き）

謝ってます。主人公。

パツと見、ハトに話しかける危ない人に見えなくも無いです。  
ともあれ、短いですが、楽しんで頂ければ幸いです。



## 六杯目 当然だろ？ ～最終話～

陽が完全に沈んだ。

公園のライトがついて、下手したら昼間より明るく感じる。

だけど、勿論違う。

太陽とライトでは、決定的に何かが違う。

同じように僕等を照らしているが、太陽とライトじゃ、何かが違う。

まあ、そんな事は当たり前なんだけども。

「いい加減・・・、帰るかな・・・」

もうそろそろ、いい時間だった。

朝からずっと握り締めていたコーヒー。

もう買った時の温もりは消えて、すっかり冷たくなっている。

僕はそれを一気に飲み干して、

「はあ・・・」

白い息を吐き出した。

白い息が僕の前に現れて、スウ、と消えていった。

何故か、その中に“アイツ”が浮かんた気がして、僕は無意識に笑った。

ああ、そうだよ・・・。と、暗くなった空を見上げる。

アイツはコーヒーが好きなんだ。

本当は、気付いてるんだろうな・・・。

そう思う。

こんな一日の話を、きつと、笑って聞いてくれるんだろうな。

こんな僕の単純な重いなんて、お見通しなんだろうな。

結局。

格好つけて、強がって、そんな毎日を繰り返してきた。

それでもその実、全然駄目で、本当にまいるな・・・。

ふと、ライトの光を何かがさえぎって、僕に影が被った。一瞬で暗くなった視界に、僕は驚いて影を見る。僕を照らすライトは僕の後ろにあった。

だから、影は後ろに何かがあって成り立つ。後ろに、誰かが立っていた。

「シヨウちゃん」

声がする。

いつもの、いつも僕の隣に居てくれる、アイツの声。

「ああ、ナオミ・・・」

僕は安心して、後ろを振り返った。

ナオミが、笑顔で立っていた。

コーヒーを二つかって、一つを彼女に渡して、僕達はベンチに座った。

「ずっとここにいて、退屈じゃなかった？」

ふと、ナオミが言った。

僕は口に含んだコーヒーを噴射しそうになったのを堪えて、何とか飲み込む。

「ずっと見てたのか!？」

「え? あ・・・、えへへ・・・」

ナオミは照れるような、複雑な顔をしてコーヒーを一口。

それ以上、ナオミは何も聞いてこなかった。

何も、聞いてこなかった。

ここに居た理由も、何も。

いつもの顔でコーヒーを飲むナオミ。

こんな所に一日中いたら、僕が“どうなった”かなんて、見当がつきそうなものなのに、ナオミは何も聞かず、ただ笑ってた。ふと、目が合って、ナオミは一層笑顔になる。

僕もニツコリと、微笑んだ。

今度は上手く、笑えたと思う。

「いつものショウウちゃんだね」

ナオミも、にっこりと笑った。

可愛い、綺麗な、真っ白な微笑み。

いつものナオミ。

いつもの顔でコーヒーを飲むお前と、

いつもの顔で、いつものように全然駄目な僕。

これからどうするか。

ずっと悩んでいた。

ベンチに座って、色んなものを見ながら、ずっと。

で、答えは出た。

でもその答えは、まだ言わないで置こう。

明日でいい。

そう思う。

いや、別に、逃げてる、とかじゃないんだ。

ただ、今はこのままでいい。

このまま、今はナオミと笑っていたい。

だから、このままでいい。

あのサラリーマンは、会社に間に合っただろうか？

あのボクサーは、今でも練習を続けているだろうか？

あの少年は、あの少女に思いのたけをぶつけただろうか？

何。大丈夫さ。

落ち込むこと、悩むことがあったら、ベンチに座ってゆっくりコーヒーを飲むといい。

大事な人を思つて、考えればいい。

何か、大事な何かがきつと思ひ出せるから。

ほら、僕だつて思ひ出したんだ。

こんな僕だつて、ちゃんと見つけ出したんだ。

ん？明日からどうするかつて？

夢に向かつて進んでみるさ。

勿論、ナオミも一緒だ。

当然だろ？

## 六杯目 当然だろ？ ～最終話～（後書き）

最終話です。

が、本当は「こういうエンディングでも良いんじゃないか」、と思った最終話をもう一通り考えてあるのです。

なのでもう一話書こうと思っているのですが、それはBUMPメドレーを読んだ人じゃないと解らないと思うので、読みたい方だけ読んでいただければ幸いです。

実質的にはこの話が最後なので、何はトモアレ、楽しんで頂けていたのなら、幸いです。

## 裏六杯目 三人で（前書き）

B U M P O F C H I C K E Nメドレーを読んでない人はいまいち意味が解らないと思うので、お引き換えしてください。

この話は読まなくても支障はありませんが、どうしても内容が気になる方は、B U M Pメドレーをお読みになった後にお読みください。図々しくて申し訳ありません。

## 裏六杯目 三人で

陽が完全に沈んだ。

公園のライトがついて、下手したら昼間より明るく感じる。

だけど、勿論違う。

太陽とライトでは、決定的に何かが違う。

同じように僕等を照らしているが、太陽とライトじゃ、何かが違う。

まあ、そんな事は当たり前なんだけども。

「いい加減・・・、帰るかな・・・」

もうそろそろ、いい時間だった。

朝からずっと握り締めていたコーヒー。

もう買った時の温もりは消えて、すっかり冷たくなっている。

僕はそれを一気に飲み干して、

「はぁ・・・」

白い息を吐き出した。

白い息が僕の前に現れて、スウ、と消えていった。

何故か、その中に“アイツ”が浮かんた気がして、僕は無意識に笑った。

ああ、そうだよ・・・。と、暗くなった空を見上げる。

アイツはコーヒーが好きなんだ。

本当は、気付いてるんだろうな・・・。

そう思う。

こんな一日の話を、きつと、笑って聞いてくれるんだろうな。

こんな僕の単純な重いなんて、お見通しなんだろうな。

結局。

格好つけて、強がって、そんな毎日を繰り返してきた。

それでもその実、全然駄目で、本当にまいるな・・・。

ふと、ライトの光を何かがさえぎって、僕に影が被った。  
一瞬で暗くなった視界に、僕は驚いて影を見る。  
僕を照らすライトは僕の後ろにあった。

だから、影は後ろに何かがあって成り立つ。  
後ろに、誰かが立っていた。

「ショウちゃん」

僕はハッ、とした。

この声。

忘れるハズも無かった。

昔、まだ夢を持っていた頃、よく聞いていた、大切な思い出の中の  
声。

聞いた瞬間、自然と涙腺が緩んでいた。

「アイカ・・・」

振り返る。

そこには、遠いあの日に死んだはずの、前の彼女が笑顔で立っていた。  
た。

二つコーヒーを買って、一つをアイカに渡して、僕はアイカと隣り  
合ってベンチに座った。

死んだはずのアイカはあの日、最後に別れた日のままの姿で、僕の  
隣に居た。

だから、これが現実であるはずは無かった。

でも、僕は特に何も考えずに、アイカの隣に座っていた。

「久しぶりだね」

アイカが言った。



「久しぶり、だな・・・」

アイカが死んで、もう三年になる。

だからアイカと会わなくなつて、四年が経つたということになる。

「元気？」

コーヒーから口を離して、アイカはこっちを見て言った。

「元気・・・、かな・・・」

どうだろう？

元気ではないかもしれない。

が、僕は答えを訂正することも無く、コーヒーを一口啜つた。

「懐かしいね。この公園で、よくキャッチボールしたね」

アイカの視線を辿つて、昔よくキャッチボールをした場所を見る。

「ああ、お前いつも全然届きもしない方向にボール投げるから、苦労したよ」

「でも、ちゃんと捕つてくれたでしょ？」

そうだな・・・。とは、口から出てこなかった。  
違う。

本当に受け止めたかったのは、ボールなんかじゃなかった。

結局、本当に受け止めたかったものは、僕の手から零れ落ちてしまつてゐる。

夢も、アイカも・・・。

「ゴメンね・・・」

突然、アイカが謝つた。

僕は驚いて、アイカの方を見る。

「約束したのにね・・・。いつか又会おう、って・・・」

言うアイカの目に、涙が溜まつているのが見えた。

「約束、守れなくて、ゴメンね・・・」

顔を両手で覆うアイカの隣で、僕は彼女に何もすることが出来なかった。

ただ座つて、心配そうにアイカを見ていた。  
でも、

口は、勝手に動いてた。

「僕……、今彼女が居るんだ……」

「……」

アイカは何も言わなかった。

僕は続ける。

「一緒に暮らしててさ……、結婚はしてないけど、でも多分いつかすると思う。彼女は働いてなくて、小さな部屋で僕の給料で暮らしてるんだ」

こんな事を言っても、逆にアイカを傷つけるだけかもしれない。でも、口は止まらなかった。

「でも、僕、リストラしちゃってさ……。彼女に、それ、言えなくて……。今日ここで、ずっと座ってて……。ずっと、考えてて……」

ああ、駄目だ……。

どんどん目頭が熱くなっていく。

これ以上喋っちゃ駄目だ、と解っていたのに、何故だろう、やっぱり続けてしまう。

「昔の……、お前と一緒に居た頃のさ……。夢……。思い出してさ……。何で、忘れたんだろう……。って……。何で、ずっと思い出さないようにしてたのかな……。って……」

泣いた。

涙が出てきた。

それでも、僕は喋り続ける。

「多分、僕は……。お前が死んじゃった事を理由にして……。夢を諦めてたんだ……。無理だって……。アイツが死んだから、もう出来ない、って……。そうやって逃げてただけだったんだ……。謝るのは、僕の方なんだ……。僕は……。何で……。うっ……。うっ……。と鳴咽が混じってくる。

こうなると、もう呂律が回らない。

僕はしばらくそうして泣き続けて、

気付くと、アイカは僕の目の前に立っていた。

「ショウちゃん」

僕を呼ぶ声はとても優しく、アイカは、笑っていた。

僕は涙を流したまま、アイカを見上げた。

「知ってたよ・・・」

と、アイカは言った。

「バンド、私のために活動休止してくれただよね？ショウちゃんは隠そうとしてたみたいだけど、私知ってたんだ・・・」

そうだった。

僕はアイカの病気を知ってから、バンドを一旦休止して、彼女に付き添うようになっていた。

「ショウちゃんは、優しいから・・・」

優しいから・・・と、アイカは繰り返した。

「ちゃんと解ってたよ。だから、あんまり自分を責めないで」と、アイカは言った。

「今、幸せでしょ？」と。

僕は何も言えずに、涙でくしゃくしゃになった顔で頷いた。

「しあわせ・・・、だよ・・・」と、小さく答える。

「それなら、大丈夫」

そう言うアイカの声が、徐々に小さくなっていった。

僕はアイカを見つめた。

アイカのからだは少しずつ薄くなっていき、闇に消えようとしていた。

「大丈夫だよ」と、アイカは言う。

「ショウちゃんなら、きっと夢を掴めるから」

だって、と、アイカは笑った。

頬に、涙が一筋伝う。

「だって、私が好きだった人だもん」

アイカの実体が、もう見えなくなっていく。

僕は最後、涙を飲み込んで、嗚咽をかみ殺して叫んだ。

「幸せだけど！お前の事は、絶対忘れないから！いつまでも！ずっと、ずっと忘れないから！！」

と。それから、

「必ず、いつの日か、また会おう！」

あの日の約束を。

いつか、又会おう。と。

また、会おうね

そんな声が、聞こえた気がした。

僕はミュージシャンの道を進み始めた。

決して順調ではないけれど、何とか彼女と二人で暮らしていける。

彼女はこの暮らしを受け入れてくれて、結婚も受け入れてくれた。

そして何と、妻は今子供をお腹に身籠ってくれている。

で、僕はその出産日に、今まさに遅れようとしていた。

簡単なTVの収録で遠くに行っている間に、子供が産まれそうだと連絡が入った。

当然収録をスッポかして、ダッシュで病院に向かった。何度か赤信号も無視したが、そんな事は気にしてられない。

廊下を走らないで！という看護師さんの忠告も無視して、分娩室に向かう。

と、

オギャー　オギャー　オギャー　・・・

頃合を見計らったかのように、中から声がした。

扉が開いて、看護師さんが赤ちゃんを抱いて出てくる。

「旦那さん、元気な女の子ですよ」

と、看護師さんが差し出されて、僕はひったくるようにその子を抱きしめた。

眺めて、はた、と、思い出したように妻の元へ小走りで寄る。

「ほら！可愛い！女の子だって！女の子ッ！」

「解ってるわよ……。落ち着いて……。ほら、赤ちゃんびっくりにしてるでしょう……？」

妻に諭されて、「ああ、そうだな……。」「と息を整える。

「ああ、可愛いわね……」

妻に赤ちゃんを見せてやると、そう言っただけに涙を流した。

「可愛いな」

僕も頷く。

「ね、名前、なんにするの……？」

妻が聞いた。

だから僕は前々から決めていた名前を堂々と言った。

「ああ、愛に華<sup>あいか</sup>って書いて、“愛華”ってどうかな？」と。

「うん、いい名前……」

妻は頷いた。

「よし、お前は今日から愛華だ」

僕は高々と愛華を掲げた。

高く高く、

掲げた。

これから僕は、何度も困難に悩まされるだろう。

だけど、大丈夫。

どんな時でも、隣に居てくれる人が居るから。

だから僕はこれからも三人で歩み続ける。

ಉಂಟು ಉಂಟು

## 裏六杯目 三人で（後書き）

読む人によって解釈が異なる結末だと思います。

が、ソレは人それぞれということで、その人の中でバッドエンドなのかハッピーエンドなのかを決定してください。

トモアレ、これで完璧に最後です。

楽しんで頂ければ幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0980b/>

---

ベンチとコーヒー

2011年1月18日03時18分発行